

「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」

金沢会議 2011

予稿集

2011年10月9日(日)、10月10日(祝)

於 石川県政記念しいのき迎賓館 セミナールームB

主催：金沢大学子どもこころの発達研究センター

共催：科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター(RISTEX)

「科学技術と人間」研究開発領域「科学技術と社会の相互作用」

研究開発プログラム「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」

金沢会議 2011 の開催にあたって

中村 信一
金沢大学長

未曾有の大震災から半年以上たった現在でも傷は癒えるどころか、むしろさらに深まっている感さえあります。大震災以降、「科学技術」に対して市民からの疑義の眼差しが向けられるようになったことは疑いえないでしょう。しかし、むしろそのような時であるからこそ、大学が市民、社会との対話を行いながら、地域、社会に対して様々なかたちで貢献していくことは、社会から課せられた責務を果たす絶好の機会でもあります。

21世紀に入って以降、自閉症をはじめとする“子どものこころの問題”はますます大きな関心をよび、この分野への世間の期待は大きくなっています。この期待に答えることは、大学が社会に対し社会的責任を果たすことでもあります。

そのようななか、金沢大学子どものこころの発達研究センター主催、金沢大学 JST/RISTEX プロジェクト「自閉症にやさしい社会」共催による「自閉症のための諸科学の協働」が開催されることを喜ばしく思います。脳科学、精神医学、心理学、教育学、経済学、社会学、哲学など、専門を異にする研究者が一堂に会し、「自閉症」についての集中的な討議が行われることは、誠に時宜にかなったことと言えましょう。

さて、本学は「地域と世界に開かれた教育重視の研究大学」というスローガンを掲げており、子どものこころの発達研究センターもその一翼を担っております。研究面では、本年度から本学子どものこころの発達研究センターが『脳科学研究戦略推進プログラム』研究拠点として採択され、自閉症をはじめとする発達障害研究のさらなる発展が期待されます。また、教育面では、来年度から千葉大学、福井大学の二大学が新たに加わり、五大学連合による大阪大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達学研究科が装いを新たにスタートします。子どものこころの発達研究センターはその歩みを着実に進めており、今後の更なる展開が期待されます。

最後に、本日お忙しいなか全国各地から金沢にお集りいただいた皆様方への感謝を申し上げますとともに、金沢大学子どものこころの発達研究センターに対するますますのご支援、ご協力を賜りますようお願いを申し上げ、ご挨拶といたします。

「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」

金沢会議 2011 の開会にあたって

東田 陽博

金沢大学子どもこころの発達研究センター長

本日、全国から自閉症の子どもこころの諸問題に関心を持つ医療関係者、人文社会科学研究者や教育福祉関係者に多数お集まりいただき、「自閉症のための諸科学の協働：脳・こころ・社会」金沢会議 2011 が開催されるにあたって、お祝いの挨拶を申し上げます。本シンポジウムは当初、3月に開催を予定されていましたが、東日本大震災の発生により一旦は中止となりました。それが今回、形式をかえて開催される運びとなりました。まずは、東日本大震災出なくなられた方々の語冥福をお祈りするとともに、罹災された方々の一早い復興を願うものです。

金沢大学子どもこころの発達研究センターは、文部科学省連携融合事業（大阪大学・浜松医科大学・金沢大学）による設置にはじまり、平成23年度からは、千葉大学と福井大学を加えて5大学で子どもこころのひづみの問題解決に当たろうとしています。特に、「金沢大学子どもこころの発達研究センター」は、文理融合（総合と呼ぼうと言う意見もある）のハタを掲げて、基礎医学生物学研究から、倫理や哲学をふくむ社会神経科学、コミュニケーション障害の語用論、協調運動障害研究や自閉症臨床治療・支援までの幅広い領域を専門とするメンバーで構成され、子どもこころの問題に挑み、社会に貢献するための組織です。

近年、こころの発達に問題を抱えている子どもを巡る様々な社会的問題が顕著になってきています。発達より早期に、子どもこころの問題に気づき、適切な支援ができれば、それぞれ子ども達が、たとえ異なる発達の道筋を辿っても、自分らしく、社会の中で生き生きと暮らすことができます。それは、子どもを育てているご家族を支えることにもつながります。「金沢子どもこころの発達研究センター」では、このような支援を実現できるシステムの構築と人的資源の養成に取り組むため、24年度から、大阪大学大学院「大阪大学・金沢大学・浜松医科大学・千葉大学・福井大学連合小児発達研究科」の開設を予定しています。今後さらに、分子レベルや脳機能に関する基礎研究から解明されるエビデンスに基づいた、治療・教育支援についても開発してゆきたいと考えています。

以上、本日、金沢の地で、また、「金沢大学子どもこころの発達研究センター」のメンバーの多くが本会に参加し、運営にたずさわる中で開かれる事は誠に有意義かと思えます。本会が実り多き事を祈念し、挨拶とします。

「諸科学の協働」が自閉症研究にもたらす可能性とリスク：

ライフコース疫学

大井 学

連合大学院小児発達学研究所金沢校 教授

RISTEX「科学技術と社会の相互作用」研究プロジェクトとして、われわれの「自閉症に優しい社会：共生と治療の調和の模索」が2年前に採択され、あと1年弱で実質的に終了する。応募前、採択後の研究開発を通じて、金沢という街を拠点に実に様々な人々同士の対話が、自閉症をめぐる積み重ねられ、現在もなお拡大中である。主要な組み合わせは、多数の市民―少数の研究者であった。「自閉症研究を業としない市民」には、当事者、家族、保育・教育関係者、医療・福祉・労働の現場で働く人々というまでもなく、そもそも直接には自閉症とは関連がない、幼稚園保護者会、地元企業経営者団体、大学生、美術工芸家、報道関係者、仏教界、ごく普通の町内会の人々、古くからの商店街関係者などなどが含まれ、多岐にわたる。自閉症の個人の家族、支援者が対話参加市民の多数派ではない。青年期・成人当事者の参加も拡大してきた。

市民の「カン」は、「自閉症は世の中の変化の副産物」、「一昔前なら問題にならなかった人」が、「今は口うるさく干渉」され、自閉症で苦しんでいる、というものである。中高年世代（ことに男性）の素朴な疑問は「個性が遺伝するのは当たり前、人は皆持ち味が違う、なぜそれが生かされないで、不登校や不採用や失職や精神疾患や引きこもりを生み出すのか？」である。診断や治療があるのかがそもそも解せないという。ところが若い人々の多くは早期診断に積極的である。

市民の盛り上がり比べ、大学に籍を置く研究者同士のそれはなお尽くされていない。研究開発の議論は十分だが、学際連携が自閉症をプラットフォームにして何をつくりだすか、想像もできないような学術的課題や方法の創成につながるのか、真正面からの議論にいたっていない。立ち話やメールで、お互いの「学問のお約束」の違いへの戸惑いの表明や、ちょっとした論争の火種くらいはついたが、燃え上がってはいない。プロジェクト代表者としては、それらがもったいないと常々思い、また、分野を超えた研究者同士の「格闘」なしには市民と責任ある対話ができないと考えてきた。原発災害対応と電力問題をひくまでもなく、全体像が見えないままでは市民と研究者は対等に協力できない。学際連携といえども聞こえはいいが、個別研究をすすめるうえでは煩わしい面があり、手間ばかりかかる割に成果が出ない、というアレルギーも根強いだろう。

今回の、自閉症のために10近い学問分野の研究者が当事者を交えて一つのテーブルにつこうという企画は、おそらく世界に前例がない。次に何につながるか？胎児期から高齢期までの生涯を通じて、自閉的特徴の発現・消褪・個人への影響の長期経過について、エピソードも想定した、生物学的、心理学的、社会学的な研究による、ライフコース疫学により、自閉症とヒトとの賢明な付き合い方をさぐるという選択肢がありうる。ただし、そこには、身体をすでに「自己家畜化」してきたヒトがココロをも科学技術で根源から統御する（自閉症をなくす）方向に向かう是非が問われないリスクがある。学問分野間の十分な議論に基づく社会との対話が、リスクと四つに組む土俵になればと期待する。

会場案内

会場：石川県政記念しいのき迎賓館3階 セミナールームB



● JR 金沢駅から

JR 金沢駅バスターミナル 東口 7～10 番、西口 4 番乗り場よりバスにて「香林坊(アトリオ前)」下車(所要約 10 分)、徒歩約 5 分

● 小松空港から

空港連絡バス(金沢市内経由)で約 50 分。「香林坊(日本銀行前)」にて下車。徒歩約 5 分。

● 北陸自動車道から

金沢西インターより車で約 20 分、または金沢東インターより車で約 20 分

プログラム

■第一部(10月9日)

12:30-12:55 受付

開会のあいさつ

- | | |
|-------------|----------------------------|
| 13:00-13:05 | 実行委員長 大井 学 |
| 13:05-13:10 | 金沢大学長 中村 信一 |
| 13:10-13:15 | 金沢大学子どもこころの発達研究センター長 東田 陽博 |

ラウンドテーブル 自閉症のための諸科学の協働

- | | |
|-------------|---|
| 13:15-13:30 | さまよえる自閉症の心理学:脱構築の必要性 大井 学 (連合大学院小児発達学研究科 金沢校) |
| 13:30-13:45 | CD38 の SNP 解析とオキシトシンによる自閉症スペクトラム障害の 症状改善 東田 陽博 (金沢大学大学院医学系研究科) |
| 13:45-14:00 | 理解と支援のための諸科学の協働 —「自閉症にやさしい社会」とはどのような社会なのか— 石原 孝二 (東京大学大学院総合文化研究科) |

14:00-14:15 休憩

- | | |
|-------------|--|
| 14:15-14:30 | 自閉症と社会学の「共生」? 竹内 慶至 (金沢大学子どもこころの発達研究センター) |
| 14:30-14:45 | 自閉症スペクトラム:制度設計の視点から 西條 辰義 (大阪大学社会経済研究所) |
| 14:45-15:00 | コメント:当事者の立場から 綾屋 紗月 (東京大学先端科学技術研究センター) 熊谷 晋一郎 (東京大学先端科学技術研究センター) M氏 (国家公務員) |
| 15:00-15:15 | 総括 村上 陽一郎 (東洋英和女学院大学・科学技術振興機構) |

15:15-15:30 休憩

- | | |
|-------------|----------|
| 15:30-16:30 | ディスカッション |
|-------------|----------|

18:30-20:30 懇親会

■第二部(10月10日)

09:15-09:30 受付

シンポジウムⅠ 脳科学・遺伝学・精神医学と自閉症

座長：棟居 俊夫

| | |
|-------------|---|
| 09:30-09:40 | 精神医学の立場から 棟居 俊夫 (金沢大学子ども心の発達研究センター) |
| 09:40-09:50 | 脳と言語発達、そして広汎性発達障害早期診断への試み 菊知 充 (金沢大学子ども心の発達研究センター) |
| 09:50-10:00 | 自閉症の遺伝学とエピジェネティクス 堀家 慎一 (金沢大学フロンティアサイエンス機構) |
| 10:00-10:20 | ディスカッション |

10:20-10:30 休憩

シンポジウムⅡ 心理学・教育学と自閉症

座長：大井 学

| | |
|-------------|---|
| 10:30-10:43 | 心(感情)・身体(情動)に向けた心理学的接近法 須田 治 (首都大学東京大学院人文科学研究科) |
| 10:43-10:56 | 自閉症スペクトラム障害における心の理論と言語の問題 藤野 博 (東京学芸大学教育学部総合教育科学系) |
| 10:56-11:09 | 「定型発達」という病 —有能さを追求する乳児研究の隘路— 川田 学 (北海道大学大学院教育学研究院) |
| 11:09-11:30 | ディスカッション |

11:30-11:40 休憩

シンポジウムⅢ 哲学・社会学と自閉症

座長：柴田 正良

| | |
|-------------|--|
| 11:40-11:50 | 自閉症スペクトラム障害と社会：大学生の自閉症認識より 田邊 浩 (金沢大学人間社会研究域人間科学系) |
| 11:50-12:00 | ライトノベルと自閉症—社会的アプローチの試み 竹中 均 (早稲田大学文学学術院) |
| 12:00-12:10 | 自閉症的完全さ(autistic integrity)の倫理 柴田 正良 (金沢大学人間社会研究域人間科学系) |
| 12:10-12:30 | ディスカッション |

12:30-12:35 閉会の言葉

第一部 ラウンドテーブル
自閉症のための諸科学の協働

さまよえる自閉症の心理学：脱構築の必要性

大井 学

連合大学院小児発達学研究科・金沢校

心理学に限らず、自閉症の3つ組がなぜ同時発現するのか、なぜ感情交流の徴候がもっとも堅固に見えるのか、に回答を出さないと、自閉症という現象の意味は分からない。自閉症の心理学研究は、ハムリン&オコナー等からの長い歴史をへて、過去20年余、心の理論、弱い中枢性統合、実行機能など心理学的構成概念の研究を中心に急拡大した。これらは、より幅広い心的機能の一部として控えめに創唱されたにすぎないが、構成概念の自閉症への寄与を測るタスクのあたりはずれ、結果の矛盾の解決に向けたタスクや研究手法改変に、イタチごっこさながら忙しい。構成概念のカクテルで自閉症を復元できるのだろうか？そもそもこの戦略が成功するのだろうか、という議論は低調である。この状況を表す好例は、幼少期虐待・遺棄で疑似自閉症が生じることの心理学意味の検討がないことだ。おそらく同じ理由でベッテルハイムの愛着理論は脳機能障害説の台頭といれかわりに捨て去られた。

心理学は情動行動レベルの当座の支援戦略を提供しようとする。脳科学にもあてはまろうが、心や脳の機能の全体的なシステムの中で自閉的心性を問わない研究と応用の妥当性はあやうい。上記の心理学的構成概念はすべて前頭葉機能関連である。それらの「障害」は、身体情動レベルのかく乱への補償かもしれない、「障害」は、みかけの創発産物かもしれない。全体性が十分問われていない事態のもう一つの好例は感覚過敏問題である。驚くべきことに、自閉症で頻発する感覚過敏についての心理学研究がまだゼロに近い。これは当事者の研究寄与が十分でないことにも関連する。皮肉だが、これ自体が、大流行の疑似科学もしくはカルト的な「支援」フィーバーの意味と同じ水準で、研究対象である。

自閉症は哲学者 Barnbaum のいうように道德共同体の共同構成者かという問いの対象である。研究者はこの価値論争と無縁ではないはずだが、問われたことがない。そのままでは、なぜ、ある特徴を持つ人が自閉症にみえ、似た特徴をもつ別の人が見えないのか、というスペクトラム問題にも、少なくとも心理学は貢献できない。

自閉症の心理学が全体性視点を強化するための方策は、すでに始まっている遺伝学研究との連携（Bishop など）を含め、抜本的に学際研究を拡大することである。その時に、前頭葉機能関連構成概念研究の蓄積は生きてくる。ただし、それは、自閉症を含めたヒトの心の全体性を、身体と社会のクロスロードで生じるプロセスとして把握すること抜きにはあり得ない。その意味ではライフコース疫学が自閉症心理学のブレークスルーにつながる場となるかもしれない。そこでは、非自閉症者のスタンダードから見た「障害」としてだけでなく、当事者との対等な連携に基づき、自閉的心性そのものが問われねばならない。ささやかな試みとして、伝統的に自閉徴候とされてきた「字義拘泥」理解に対する演者の脱構築的な転回の提案、ならびにこれまでほぼ見過ごされてきた疑問詞質問対はい・いいえ質問問題の異文化比較を踏まえつつ、脱構築へのてがかりとして提供したい。

CD38 の SNP 解析とオキシトシンによる自閉症スペクトラム障害の症状改善

東田 陽博

金沢大学大学院医学系研究科 脳細胞遺伝子学分野

金沢大学子どものこころの発達研究センター 相互認知研究基礎部門

大阪大学大学院大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達研究科金沢校

オキシトシンとバゾプレシンは視床下部神経細胞で作られ、その部位のオキシトシン産生神経の樹状突起から脳内に放出される。オキシトシンの血中への分泌は、他の多くのホルモンや神経伝達物質の分泌と同じく、脱分極による Ca の流入による細胞内 Ca 上昇が喫機となって脱分極-分泌連関という生理学上の一つの法則に従って分泌される。しかし、中枢への分泌には、細胞体の神経興奮が必ず必要ではないことが示され、2005 年、生理学の一大きい原則である「脱分極-分泌連関」に乗らない分泌である事が示された。2007 年、我々は、脳内分泌に CD38 が作るサイクリック ADP リボースが細胞内カルシウム貯蔵サイトにあるリアノジン受容体カルシウム遊離チャンネルに作用して、細胞内のカルシウム濃度を上昇して、オキシトシンのみを特異的に分泌する機構を発見して、この謎を解明した。

CD38 の欠損と社会性認識行動の異常関連する事から、社会性認識障害を中心症状とする自閉症圏患者 (Autism Spectrum Disorder, ASD) の CD38 遺伝子解析をおこなった。ヒト CD38 の遺伝子は染色体 4p15 上にある。イントロン部の 10 ヶの SNP を抽出し、SNP 解析をした。エクソン部の SNP はシークエンス (再シークエンス方法) で変異を見出した。イントロン部の SNP 解析を AGRE (Autism Gene Resource Exchange) の 252 人の自閉症者の DNA で調査した。rs3796863 (A > C) に IQ が 70 以上のいわゆる高機能自閉症者のみのサブグループで、高い相関を得た。この SNP が自閉症と相関をもつことは、イスラエルの自閉症研究で確認された。一方、CD38 のエクソン部の SNP は、数ヶ所で見出された。特に、我々が注目したのは、第 III エクソン部の rs1800561 (C > T) である。何故なら、この SNP は日本人の 1~5% (調査地点により異なる) に見られるが、モンゴル系が混入していると思われるポーランド人等の白人を除いて、白人にはほとんど見出されず、日本人 (アジア人) に特異的 SNP である点と、この変異が 140 番目のアルキニンをトリプトファンに置換するからである (R140W)。我々は韓国の構造生物学者の共同研究により、NAD を結合する活性中心部をルーズな構造へと変化させる事を見出した。

SNP は金沢大学病院精神科の ASD 患者 29 人中約 10% の 3 人に見出された。一方、3 人の患者の家族の調査を行ったところ、父親も R140W を持ち、自閉症傾向がみられた。調査できた家族 28 人中 18 人に R140W があり (64%)、兄弟は ASD である患者ないし、PDD-NOS であった。家系中、ASD は全てこの R140W 遺伝子を持っていた。血中オキシトシン量を計測し、比較したところ、3 人の血中濃度は、R140W を持たない ASD 患者よりも低かった。また、家族の中で R140W を持つ人の血中濃度は持たない人よりも低かった。

以上の遺伝子、血中濃度の測定により、原因としての血中オキシトシン濃度の低下 (中間表現型) が R140W 遺伝子を持っている事によると考えられることから、オキシトシン補充療法を試みる理論的な対象を初めて見出したと言える。勿論、R140W を持たない低オキシトシン血中濃度を示す ASD 患者もいるという事は R140W 以外の原因が考えられ、これらの人達の原因を探る事と、その中間表現型に対してもオキシトシンによる治療対象となる事を示唆する。

実際、オキシトシンを鼻腔より投与した知能の低いカナリー型自閉症男子では、暴力などの衝動性の低下と感情を伴う親子関係やコミュニケーションの成立がみられた。現在そのような症例が集まりだしている。

理解と支援のための諸科学の協働 —「自閉症にやさしい社会」とはどのような社会なのか—

石原 孝二

東京大学大学院総合文化研究科

自閉症スペクトラム(ASD)の有病率は米国 CDC の 2006 年の調査では 110 人に 1 人 (約 0.9%) とされている。最近の調査では、2%を超えるという報告 (Kim et al. 2011) もあるが、いずれにせよかつての 1 万人に数人というような調査結果よりはるかに多い。このことはかつて考えられていたよりもはるかに多くの人々が支援を必要としているということを意味している。ASD の理解や ASD の人々への支援にとってどのように寄与できるのかという観点から科学的研究の意義を検討していくことが、「自閉症にやさしい社会」の実現に向けた諸科学の協働をはかるうえで必要な作業となるだろう。また、限られたリソースの効果的な配分の仕組みに関する研究も避けて通れない。今もっとも必要とされている支援、効果的・実施可能な支援を把握し、優先的に提供していくための制度設計の研究を恒常的に行っていくことが必要である。

自閉症に関する遺伝学的・脳科学的な基礎研究は自閉症の生物学的な理解を深めるために重要だが、基礎研究の成果が治療や支援に結びつくには時間がかかることが多く、原因の究明が必ずしも治療に結びつくとは限らない。メディアで基礎研究の成果が報道される際に、このことが十分強調されない場合が多く、期待と実態のギャップが日々生じているように思われる。基礎研究また、自閉症に関する基礎研究がスティグマ化やエンハンスメントの問題を誘発する可能性があることにも注意を払う必要があるだろう。例えば自閉症の人の血族を対象にした Broad Autism Phenotype の研究や、健常者の ASD 的特性を対象にした研究などは、その研究手法や研究成果の出し方などについて慎重に吟味する必要がある。

自閉症の治療法に関しては、エビデンスのある治療法は行動療法的なものに限られているが、薬物治療としてはオキシトシンが注目されている。発達障害に対する薬物治療はエンハンスメントの議論の対象となってきたところであり、オキシトシンについても議論が必要だろう。他方、行動療法に関しては、有効性に関するエビデンスが集積されてはいるが、行動療法に関してはそもそも厳密に統制された比較対象実験が難しいことや (村松・門 2009)、人によって効果が大きく変わりうることを考慮に入れる必要がある。また、アメリカなどの研究でエビデンスが得られている療法を導入する際には、その効果が社会的・文化的条件や療育者のスキルの違いに左右されることにも留意しなければならない。療法の研究者や実践者が「エビデンス」の持つ意義と限界について理解していることが重要であろう。

「諸科学の協働」を考える際には、このような問題を視野に入れながら、科学的研究が自閉症に対して何をもたらすのかを見据える必要がある。そもそも ASD の診断と ASD の人への支援はなぜ必要なのか、どのような基準・プロセスで診断されるべきなのか、自閉症はそもそも治療されるべきものなのか、「自閉症にやさしい社会」とはどのような社会なのか (個人々人への支援が十分提供される社会なのか、ASD の人が適応しやすい制度的工夫が十分されている社会なのか) など、自閉症の概念そのものや基本的な社会デザインに関する議論から逆算して、求められる協働のあり方が検討されていくべきだろう。そのためにも、「自閉症にやさしい社会」のモデルの批判的な研究が継続的に行われ、フィードバックされていくことが重要であろう。

自閉症と社会学の「共生」？

竹内 慶至

金沢大学子どものこころの発達研究センター

「自閉症」という現象に対して社会学はいかに向き合うことが可能か、あるいは向き合うべきなのか。「自閉症」という現象の解明に対して社会学が何かなし得ることはあるのか。なにもこのような大げさな問いを立てなくても、社会学がなし得る仕事は山ほどある、というのが報告者の答えである。

報告者自身は自閉症に関する研究をはじめて2年ほどしか経っていない。しかし、これまで先行研究の検討やフィールドワーク等を重ねてきた結果言えるのは、「社会的に明らかになっていることほとんどない」ということである。これはある意味驚くべきことである。だが、なぜ自閉症に対する社会的アプローチがほとんど進んでないのか。その理由はいくつか考えられる。第一に、自閉症の科学的解明自体に不安定さがあり、そのことが自閉症現象の社会的な記述を困難にしている側面があること。第二に、自閉症だけでなく障害一般に社会学が足を踏み入れることの忌避感があること。これはある種の「実践」や「価値」にコミットメントすることに対する忌避という側面もあるだろう。第三に、「自閉症当事者」へのアプローチが難しいこと。挙げればきりがなが、社会的な解明が進んでいないとばかり嘆いていても仕方がない。社会学が可能なこととは一体なんなのか、いくつか例を挙げたい。

まず、(1)社会学の「十八番」のひとつである「社会構築主義」を援用し、どのように「自閉症という社会現象」が構築されてきたのかを明らかにすることが可能であろう。どのように自閉症という社会現象が構築されてきたのか？という問いに向き合い、記述していくことは、例えば「自閉症の増加」という大きな謎の究明につながる可能性がある。これはこれで大きな貢献といえる。また、(2)大規模疫学調査において、社会的変数を提案することも可能である。出身階層や階級、あるいは地域等の変数を調査計画に組み込むことは可能であるし、必要なことでもあるだろう。さらに、(3)自閉症を取り巻く様々な「(臨床)現場」を調べ、そこにどのような現実、生活、仕組みがあるのか知ること。そしてそのうえで、(4)「自閉症に優しい社会」(RISTEX プロジェクト)を構想することも可能である。

ここで挙げた4つの例はそれぞれ、(1)構築主義の社会学、(2)経験科学としての社会学、(3)臨床社会学、(4)政策科学としての社会学、に対応している。つまり、「自閉症」というフィールドは、ほとんどすべての社会学者にとってコミットメント可能な領域であると言える。

自閉症スペクトラム：制度設計の視点から

西條 辰義

大阪大学・UCLA

私の専門は自閉症やそれに関連することではありません。経済学における制度のデザインに長い間携わってきました。制度のパフォーマンスをみるために被験者を用いる実験も実施しています。特定領域研究である「実験社会科学」の領域代表者として心理学研究者、生物学者、脳科学者などとの交流があります。そのような中で、昨年度、領域研究の一環としてADHDで書字障害を克服なさっておられるジョナサン・ムーニー氏の講演会を開催しました。そこからADHDや自閉症スペクトラムのお子さんをお持ちの親御さんとのメールでの交流が始まっています。以下、すでに常識となっていることかもしれませんが、お話をさせていただきます。

自閉症スペクトラムをとりまく根本的な問題は何でしょうか。ヒトは生まれた時点では真っ白であり、いわば様々な教育を通じて白板に絵を描いていくのだ、というタブラ・ラサ仮説ないしはブランク・スレート仮説が幅をきかしているからではないのでしょうか(Watson (1930), Pinker (2002))。先日、書字障害セミナーに参加したお母さんからメールがきました。セミナー参加者のほとんどは障害児クラスを担当する先生だったのだそうですが、「不注意」と題する子供の漢字書き取りのサンプルをみて先生方から失笑が起こったのだそうです。想像するに子供はイヤな漢字のテストに望んだに違いありません。その子なりにがんばって書いたプリントをなぜ不注意とするのでしょうか。普通の人視点からすると「不注意」に見えるのでしょうか。Iwata (1986)は脳の左半球側頭葉後下部が漢字の処理に関わっていることを示しています。この部分に障害のあるおさんは漢字が苦手になってしまうのかもしれませんが。アルファベットはこの部分に関与していませんので、このおさんはひょっとすると非漢字圏の国々で生まれたなら、書字障害とはならなかったのかもしれませんが。ヒトは生まれながらにして進化のプロセスを経て得た「人間性」をすでに持っている、それが皆違っているのだ、という認識を学校の先生や生徒、ひいては市民の皆さんが持つような仕組みをデザインせねばならないのでしょうか。

それでは何を目標とすればよいのでしょうか。お子さんのお一人お一人をタックスペイヤーにすることにつけるのではないのでしょうか。そうすることでご本人も、親御さんも、周囲の方々も「しあわせ」になれるのではないのでしょうか。行政側にとっては発達障害関連の費用を最小化することにもつながります。目利きの先生が、義務教育といえども、子供の「しんどい」ところには無理に負荷をかけず、本人の持つ得意なところを伸ばす教育を実施できる制度のデザインです。日本人には独創性が欠如しているという類の話をよく聞きますが、自閉症スペクトラムのお子さんの中から、新たな発明・発見をなさる方が出てくるかもしれません。ポイントはそのような芽を二次障害などで摘んでしまわないことです。

経済学に実験研究を導入し、方法論を確立し、様々な分野との交流の可能性を開拓した Vernon Smith 教授はノーベル賞受賞後、自らがアスペルガーであることを告白し、困難な少年時代や不屈の研究者魂をご披露なさっておられました。このような方を日本から輩出できる制度のデザインも必要です。

登壇者プロフィール

■話題提供者

大井 学（おおい まなぶ）

専門はコミュニケーション障害学。京都大学大学院教育学研究科博士課程退学（博士・教育学）。愛媛大学、金沢大学などを経て、2009年より大阪大学大学院・大阪大学・金沢大学・浜松医科大学連合小児発達学研究科教授。2009年度より、科学技術振興機構（JST）社会技術開発センター（RISTEX）プロジェクト「科学技術と人間」研究開発領域「科学技術と社会の相互作用」研究開発プログラム「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」代表。著書に『言語発達障害学』（共著）『生きたことばの力とコミュニケーションの回復』（共著）『特別支援教育における言語・コミュニケーション・読み書きに困難がある子どもの理解と支援』（編著）など。

東田 陽博（ひがしだ はるひろ）

専門は神経科学・神経薬理学。名古屋大学大学院医学系研究科修了（博士・医学）。名古屋大学、金沢大学などを経て、2008年より金沢大学子どものこころの発達研究センター長。研究業績に、Higashida, et al. (2011). CD38 gene knockout juvenile mice: a model of oxytocin signal defects in autism. *Biological & Pharmaceutical Bulletin*, 34(9), 1369-1372.、Higashida, et al. (2010). Oxytocin signal and social behaviour: comparison among adult and infant oxytocin, oxytocin receptor and CD38 gene knockout mice. *Journal of Neuroendocrinology*, 22(5), 373-379.など。

石原 孝二（いしはら こうじ）

専門は、科学技術哲学、科学技術倫理学。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了（博士・文学）。北海道大学などを経て、2008年より東京大学大学院総合文化研究科准教授。著書に、『岩波講座・哲学』第五巻（共著）、『科学技術倫理学の展開』（編著）、アルヴァ・ノエ『知覚のなかの行為』（監訳）など。

竹内 慶至（たけうち のりゆき）

専門は、医療社会学、ケア論、感情社会学。大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程単位修得退学。金沢大学研究員を経て、2011年より、金沢大学子どものこころの発達研究センター特任助教。著書に、『現代の高校生は何を考えているか』（共著）など。

西條 辰義（さいじょう たつよし）

専門は、制度設計、実験経済学。アメリカ合衆国ミネソタ大学経済学研究科博士課程修了（博士・経済学）。オハイオ州立大学、カルフォルニア大学、ワシントン大学、筑波大学などを経て、1995年より大阪大学社会経済研究所教授。CASSEL (UCLA) 研究員。特定領域研究「実験社会科学」領域代表者。著書に、『地球温暖化の経済学』（共著）、『脳を知る・創る・守る・育む 11』（共著）、『実験経済学への招待』（編著）など。

■コメンテーター

綾屋 紗月（あやや さつき）

専門は当事者研究。大学時代は哲学を専攻。卒業後は、家庭教師、塾講師、ベビーシッター、保育園勤務などを数年間つとめる。2006年、アスペルガー症候群の存在を知り、診断名をもらう。現在は、東京大学先端科学技術研究センター研究者支援員。著書に、『発達障害当事者研究』（共著）、『前略離婚を決めました』、『つながりの作法』（共著）など。

熊谷 晋一郎（くまがや しんいちろう）

小児科医。新生児仮死の後遺症で、脳性マヒに。以後車いす生活となる。東京大学医学部卒業後、千葉西病院小児科、埼玉医科大学小児心臓科での勤務、東京大学大学院医学系研究科博士課程での研究生活を経て、現在は、東大先端科学技術研究センター特任講師。著書に、『発達障害当事者研究』（共著）、『リハビリの夜』、『つながりの作法』（共著）など

M氏

東北大学文学部哲学専修を卒業後、国家公務員として勤務。現在は休職中。2010年に自閉症の診断をもらう。就職活動と職業生活でうまくいかなかった点が、発達障害の特性によるものだとわかり、逆に、その特質を強みとして生かす方向でさまざまな試みを行っている。

■総括

村上 陽一郎（むらかみ よういちろう）

専門は科学史、科学哲学。東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了。上智大学、東京大学先端科学技術研究センター、国際基督教大学、東京理科大学大学院などを経て、2010年から東洋英和女学院大学学長。また、科学技術振興機構・社会技術開発センタープロジェクト「科学技術と人間」研究開発領域統括を務める。著書に『科学者とは何か』、『文明のなかの科学』、『あらためて教養とは』、『安全と安心の科学』、『人間にとって科学とは何か』など。

第二部 シンポジウム

I. 脳科学・遺伝学・精神医学と自閉症

II. 心理学・教育学と自閉症

III. 哲学・社会学と自閉症

精神医学の立場から

棟居 俊夫

金沢大学子どものこころの発達研究センター

自閉症の本質が社会性の、つまり対人交流の不具合とすると、これは不思議な病気である。なぜなら人間社会は人間同士が、戦争や憎み合いがあつたとしても、協力して作り上げてきたものであるからだ。対人交流がなかったならば、この人間社会は生まれていない。

その対人交流の不具合、社会性の本質的なぎこちなさは、知的障害を有する自閉症の幼児とともに時間を過ごすと共に実感させられる。そして、なぜこのような病気があるのかと考えてしまう。

私は、手前味噌に思われたらご容赦いただきたいが、30歳代の10年余り、多くは知的障害を有する自閉症の幼児の治療に携わっていた。おそらく数百人の彼らと、数週間毎に30分ほどの時間を過ごす。遊戯療法をしたことになっているが、治療法がなかったので、遊戯療法室に二人の人間がいただけと言ってもよい。

そこでは一緒に遊ぶという状況が成立しない（細かく見れば、わずかな対人交流は成立しており、また優れた治療者が名人芸のように対人交流を成立させてしまう場面も見てきたが、全体として見れば対人交流は成立していない）。従って、彼らが一人で遊ぶのを後からついていって眺めることになる。これはほんとうに不思議な状況だ。

親が悲しむのもよく理解できる。わが子なのに気持ちが通じないのだから。

自閉症の治すことのできない社会性の不具合を治せるようにしようという試みは、必然的に、社会性、つまり人間社会とは何かという医学の範疇を超えたところに行きついてしまう。マウスが哲学とつながっているとも言える。これは魅力的な課題だ。

しかし、医学は実際的な学問である。自閉症の方々がおそらく感じているはずの想像を絶する苦しみ、家族の長期間にわたる重い負担（ある父親は自閉症のわが子がこだわりとしてせがむので、夜の8時から2時間のドライブを3歳から6歳になるまで、ほとんど毎日、1年365日、続けていた。ドライブをしないと寝付かないのである。晩酌は寝付いた後、家族旅行など夢物語であった）を軽減したいと願う学問である。

いま、医学は自閉症を治すという重い扉をこじ開ける道具を手にはしているかもしれない。それはオキシトシンというだれもがからだの中に持っているホルモンである。これを大切にしていきたい。

脳と言語発達、そして広汎性発達障害早期診断への試み

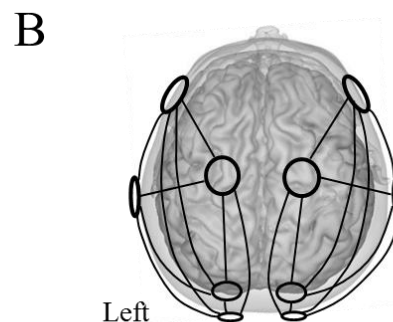
菊知 充¹⁾、三邊 義雄²⁾

¹⁾ 金沢大学子どものこころの発達研究センター、

²⁾ 金沢大学大学院脳情報病態学

最近の研究により、脳の左半球の成熟が、言語の発達に重要であることが解明されつつある。しかし、就学前（特に5歳以下）の子供についてはほとんど検討がなされていない。理由として、測定に用いられるMRI（磁気共鳴画像装置）などの手法が、低年齢の子供には施行困難であることが挙げられる。そこで我々は、非侵襲的なだけでなく、幼児においても容易で優しく脳機能測定が可能な幼児用MEG（脳磁図計）を産学連携のプロジェクトで開発し（下図A）、この点について検討した。対象は78人の就学前児童（32～64か月）で、脳の機能的結合の側性化と言語発達についての検討を行った。結果は、シータ帯域（6～8Hz）の律動を介した側頭部と頭頂部を結ぶ結合（コヒーレンス）が左優位であるほど、言語機能が高いことが示された。そして、この機能結合の側性化と、他の因子（非言語性の認知機能や、月齢、頭囲）との相関は認めなかった。本研究における側頭部のMEG超伝導センサーの海馬までの距離は6～7cmと推定され、通常の成人用MEGを用いた場合の距離（8～9cm）に比して近く、我々の開発した幼児用MEGを用いることで、海馬からの信号強度はおおよそ1.8倍に上昇すると推定されている。このような条件から、海馬や海馬傍回、帯状回などを含む比較的深部のシータ律動の機能的結合も反映されている可能性がある。さらに、本解析手法による、広汎性発達障害児の鑑別についての可能性について述べる。

本研究結果は、ほくりく健康創造クラスター（富山・石川地域）によって進められているパンピプランの結果の一部である。本プロジェクトの目的は、広汎性発達障害の早期診断を実現するために、幼児用脳磁計-近位赤外線スペクトロスコープマルチモダリティ脳機能計測装置の開発と、臨床応用を進める事である。



A, 幼児用MEG

B, 今回、機能的結合を調べたセンサーの位置

自閉症の遺伝学とエピジェネティクス

堀家 慎一

金沢大学・フロンティアサイエンス機構

自閉症は、「言語発達の遅れ」「コミュニケーション能力の障害」「反復的で常同的な行動」を特徴とした広汎性神経発達障害である。自閉症の有病率は、150人に1人といわれ、その男女比は4:1とされる。社会・環境と遺伝的背景が発症に関与していると考えられているが、その原因遺伝子、発症メカニズムは未だ明確にされていない。

近年、マイクロアレイ技術の発展により、自閉症患者で特異的なゲノムコピー数多型(CNVs)が様々な染色体領域で同定されるに至っている。しかしながら、自閉症の発症に直接結びつくような原因遺伝子の同定に成功した例は非常に希で、自閉症患者で認められるゲノムの欠失、重複により二次的に周辺の遺伝子の発現に影響を与えている可能性が示唆される。また、レット症候群、脆弱性X症候群などの広汎性神経発達障害の原因は、メチル化CpG結合タンパク質やRNA結合タンパク質の欠損であり、自閉症発症機序におけるエピジェネティック因子の関与もまた疑われている。

我々は自閉症患者で最も頻回に認められるCNVsである母方アレル特異的15q11-q13の重複に着目し、自閉症の発症機序の解明に取り組んでいる。15q11-q13領域は、代表的なゲノム刷り込み領域であり、この領域のゲノム刷り込み遺伝子の異常に関わる疾病として、プラダーウィリ症候群(PWS)、アンジェルマン症候群(AS)が知られている。程度の差はあるものの共に精神遅滞が認められ、特にASは自閉症と共通の症状が認められることなどから、15q11-q13領域の母性発現遺伝子*UBE3A*の自閉症への関与が強く示唆される。また、一部の自閉症患者で*UBE3A*や*ATP10C*、*GABA*レセプター遺伝子群の発現量の低下などが報告されているが、いずれも自閉症患者で高頻度に認められる母方アレル特異的重複がいかに関与しているかを説明出来るものではない。これまでに我々は、15q11-q13領域の「染色体ペアリング」と呼ばれるクロマチンダイナミクスに着目し、神経分化に伴い15q11-q13領域の核内配置が如何に制御されるかについてSH-SY5Y細胞を用いた実験で明らかにした。本シンポジウムでは、以上のような自閉症発症機序におけるエピジェネティクスに関する最新の知見を紹介する。

登壇者プロフィール

棟居 俊夫（むねすえ としお）

専門は精神神経科学。金沢大学医学部卒業、医学博士。研究テーマは児童・青年期精神医学に関する研究等。金沢大学講師、特任准教授等を経て、2011年より金沢大学子どものこころの発達研究センター特任教授。主要論文に、Munesue, T. et al. (2010). Two genetic variants of *CD38* in subjects with autism spectrum disorder and control. *Neuroscience Research*, 67(2), 181-191.、Munesue, T. (2008). High prevalence of bipolar disorder comorbidity in adolescents and young adults with high-functioning autism spectrum disorder: A preliminary study of 44 outpatients. *Journal of Affective Disorders*, 111 (2-3), 170-175.など。

堀家 慎一（ほりけ しんいち）

専門は分子遺伝子学・分子生物学。研究テーマはヒト染色体工学技術を用いた自閉症罹患遺伝子座の解析。鳥取大学医学系研究科生命科学専攻修了（博士・医学）。鳥取大学、ローレンスバークレイ国立研究所 IRSF、トロント小児病院の博士研究員、徳島大学疾患酵素学研究センター助教を経て、2007年より金沢大学フロンティアサイエンス機構特任助教。主要論文に、Horike, S. et al. (2009). Screening of DNA Methylation at the H19 Promoter or the Distal Region of its ICR1 Ensures Efficient Detection of Chromosome 11p15 Epimutations in Russell-Silver Syndrome. *American Journal of Medical Genetics*, 149A, 2415-2423.、Horike, S. et al. (2005). Loss of Silent Chromatin-Specific Looping and Impaired Imprinting of *DLX5* in Rett Syndrome. *Nature Genetics*, 37, 31-40. など。

菊知 充（きくち みつる）

専門は精神神経科学。研究テーマは脳磁図と光トポグラフィーの同時測定・子どもの脳の発達。金沢大学医学部卒業、医学博士。金沢大学医学部助手、特任助教を経て、2011年より金沢大学子どものこころの発達研究センター特任准教授。主要論文に、Kikuchi M, Hiroswa T, Yokokura M, et al. (2011). Effects of brain amyloid deposition and reduced glucose metabolism on the default mode of brain function in normal aging. *Journal of Neuroscience*, 31(31):11193-11199.、Kikuchi M, Shitamichi K, Yoshimura Y, et al. (in press). Lateralized theta wave connectivity and language performance in 2- to 5-year-old children. *Journal of Neuroscience*.など。

第二部 シンポジウム

I. 脳科学・遺伝学・精神医学と自閉症

II. 心理学・教育学と自閉症

III. 哲学・社会学と自閉症

心（感情）・身体（情動）に向けた心理学的接近法

須田 治

首都大学東京 大学院人文科学研究科

アスペルガー症候群，自閉症スペクトラム障害（ASD）の探究・支援に関わる人びとには，認知偏重から脱し，当事者主体の生態に近づくことが求められている。そこで発達臨床からの視座として，身体的な情動（emotion），心的表象化された感情（feeling）の発達をとらえる接近法を，著者は取りあげる。すなわち情動発達が，主体の自他関係を原理的に支えているととらえる実証性と，当事者の危機と疎外感を生み出す特殊で固有の主体の感情的なフィードバック，適合感をとらえる支援との統合の必要を認めることにする。

この心身論は，脳神経科学的な研究により従来の心理主義心理学を超える知見が開かれて生じた。すなわち①2000年頃から情動のセンター（扁桃体など）と認知のモニタリング（前頭前野など）との機能的連携に関する知見を取り込み（例，Le-Doux, 1996； Baron-Cohen et al., 2000），また②身体内変化から生まれる変化「一次的情動」，および内臓感覚などからの表象化によって生まれる感情（情動体験）の生成；「二次的情動」，この二相モデルを踏まえることにする（Damasio, 1994； 2003； Bechara, 2004）。

さらにより具体化された個人に近づくべき必然性が，心理学理論検討から引きだされた。まず①感情は，自己組織的に生成されると考えられ（Mascolo, Harkins, & Harakal, 2000），また②個別の感知系，命題系の記憶などによって，個人固有の適合感情が生みだされるとも考えられる。

こうして本研究では，基本的に代表値・一般化のみに研究を閉ざすのではなく，個人固有の適応感や障害機序についての観察・分析を強調する。ケースの適応への個人の調整も調整不全もとらえ，困難に対応したオーダーメイドの援助を原理的に探究することにする。

今回の報告では，事例間の共通部分も含め，事例それぞれについてもとりあげる。本研究では，実験支援として①アセスメント（不安の特徴など），②筋弛緩法（効果の意味），③「お芝居技法」とよぶ試み（その有効性推測），④感情対話プログラム（個人固有な反応内容分析）のいずれか一部を示す。

身体的な情動という「ウツワ（器）」から，感情化された表象として「私に与えられたキョウグウ」をとらえ，さらに当事者がその言語化の過程も今後は検討するつもりである。

自閉症スペクトラム障害における心の理論と言語の問題

藤野 博
東京学芸大学

自閉症スペクトラム障害 (ASD) においては心の理論 (TOM) に問題を生じるが、一定レベル以上の言語力をもつ ASD 児・者は TOM 課題に通過できることも指摘されている。Happé (1995) は代表的な TOM 課題である誤信念課題 (FB 課題) に正答できる ASD 児の言語性精神年齢が 9 歳以上であることを示した。Steele ら (2003) は、ASD 児の TOM の発達的变化を検討し、TOM 課題成績の向上と言語力との関係を報告した。別府ら (2005) は FB 課題を解ける ASD 児は例外なく言語的な理由付けができる一方、典型発達児 (TD) 児はそうでなかったことから ASD 児における TOM の解決と言語力との関係について命題的心理化の観点から考察した。Frith ら (1994) はそうした言語力を駆使した TOM 課題の解決法を“ハッキング”と表現している。TOM 課題の解決に関係する言語の領域として近年とくに統語力が注目されている。de Villiers (2000) は補文をもつ統語構造を処理する力が FB 課題の解決に関係するという仮説を提唱した。Fisher ら (2005) は ASD 児の TOM 成績には統語力が特に強く影響を与えていたことを、Lind ら (2009) は ASD 群において補文記憶課題の成績と FB 課題の成績に相関があったことを報告した。

これらの先行研究をふまえ、我々は ASD 者と TD 者における TOM 課題の解決方略の違いについて検討することを目的とし、TOM 課題と言語・コミュニケーションの問題や特徴を包括的に検出できる評価尺度である CCC-2 を実施した。ASD 群は 27 名 (男 20 名、女 7 名；CA 平均 8 歳 7 ヶ月) で、WISC-III の平均値は VIQ が 98.7 (SD=16.6)、PIQ が 98.8 (SD=11.8) であった。TD 群は 25 名 (男 11 名、女 14 名；CA 平均 8 歳 0 ヶ月) であった。ASD 群と TD 群に「アニメーション版心の理論課題 Ver.2」(藤野, 2005) と CCC-2 日本語版 (Bishop, 2003；大井ら, 2007) を実施した。その結果、TOM 成績は通過課題数 (0-5) の平均値が ASD 群は 2.7 (SD=1.3)、TD 群は 3.7 (SD=1.2) で、両群間に有意差がみられた ($t(50) = 2.79, p < .01$)。CCC-2 の言語に関係する 8 つの下位尺度の粗点を説明変数とし、TOM 課題通過数を目的変数としてステップワイズ法による重回帰分析を行ったところ、ASD 群においては“syntax (統語)”のみが TOM 成績に有意に影響を与える変数として選択され ($R^2 = .20, \beta = -.45, p < .05$)、TD 群においてはそのような変数はひとつも選択されなかった。この結果より、TD 者と異なり ASD 者にとって TOM 課題が遂行できることには統語力のみが影響していることが明らかとなった。

以上の知見や我々のデータに基づき、TOM 課題成績とは ASD 者にとっていったい何の指標であるのか、TOM という視点からの ASD の検討には意味があるのか、あるならそれはどのような意味か、などについて議論したい。

「定型発達」という病 — 有能さを追求する乳児研究の隘路 —

川田 学

北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター

1. 定型発達における早期願望

登壇者は、乳児発達研究の末席に座る者であり、自閉症スペクトラムについての最新研究を提供することはできない。そこで、むしろ「定型発達」なるもの - 特に乳児のそれ - が、(発達)心理学においてどのように語られてきたかを見ることによって、今日の自閉症に関する理解のある種のバイアスを掘り出してみることにしたい。

大きな研究史で見たとき、乳児に関する表象は無能な存在から有能な存在へと変遷してきた。過去には1歳で発生すると目されていた能力が新生児で、あるいは、4歳で達成すると言われた課題が1歳で可能だという知見が次々現れる。ここには、「能力」測定する尺度(課題, 刺激, 装置)の発展という側面もあるが、「より早いことに価値がある」という、発達心理学を支配するメタ理論の存在がある。そして、より早いことは有能であることを意味し、より早く現れることには「人間らしさ」の本質が隠されているとの連想バイアスも見え隠れする。

2. 共感の時代

多くの乳児研究者が関心をもつ現象に、「共感」がある。ミラーニューロン(システム)の発見は、この関心に勢いをつけた。一方、乳児に広くみられる「共感」と対置されるかたちで、自閉症の障がいと語られる。Baron-Cohenが、「心の理論」欠如説を唱えたのは1980年代だが、以降共同注意、第一次間主観性、そして情動伝染へと、自閉症の「中核障がい」をめぐる発達的により早期の段階へと進んでいった。こうした自閉症をめぐる通説の変遷もまた、定型発達における有能な乳児への期待と軌を一にしている。こうした、特に社会的有能さへの過剰な期待は、一方で自閉症を非自閉症者の観点から理解しようとする傾向に拍車をかけた可能性があるという意味でも反省を要するが、他方では、「定型発達」のハードルそのものを押し上げているように思われる。つまり、この共感フィーバーは、①自閉症などの“非定型”発達と呼ばれる人々とのコミュニケーションにおいて、その齟齬を“共感の欠如”“社会性の欠如”という片側一方の課題へと問題をすり替えてしまう傾向を誘い、②さらに、“定型”発達と呼ばれる人々の中にも絶えざる差異化を生んでいる。つまり、とても共感的な人からとても共感的でない人までの、そのスペクトラムの目盛を細かく設定することになり、コミュニケーションにおける“ふつう”であることのハードルを上昇させる作用をもっている。したがって、自閉症をめぐる認識の再構築は、おのずと「定型発達」研究の在り方を問う作業から離れることができない。

登壇者プロフィール

須田 治（すだ おさむ）

専門は発達心理学・臨床発達心理学。研究テーマはアスペルガー障害など人間関係における情動的な調整不全の解明とその発達臨床的支援等。1979年東京都立大学人文科学研究科心理学専攻単位取得満期退学、博士（文学）。2007より首都大学人文科学研究科教授。著書に、『情緒がつむぐ発達』（単著）、『社会・情動発達とその支援』（共編）、『情動的な人間関係への対応』（編著）など。

藤野 博（ふじの ひろし）

専門はコミュニケーション障害学・臨床発達心理学。研究テーマは自閉症スペクトラム障害（ASD）を中心とする発達障害児の語用のアセスメント法の開発・ASD児・者の心の理論の問題等。東北大学大学院教育学研究科博士前期課程修了、博士（教育学）。川崎医療福祉大学、東京学芸大学准教授等を経て、2009年より東京学芸大学教育学部教授。著書に、『自閉症スペクトラム SST スタートブック』（共著）など。

川田 学（かわた まなぶ）

専門は発達心理学および保育・幼児教育。研究テーマは乳幼児期における自己意識と他者理解の発達連関に関する研究等。東京都立大学大学院人文科学研究科（心理学専攻）博士課程単位取得満期退学、博士（心理学）。香川大学を経て、2010年より北海道大学大学院教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター准教授。著書に、『小学生の生活とこころの発達』（共著）、『やさしい発達心理学』（共著）、『親と子の発達心理学—縦断的研究法のエッセンス』（共著）など。

第二部 シンポジウム

I. 脳科学・遺伝学・精神医学と自閉症

II. 心理学・教育学と自閉症

III. 哲学・社会学と自閉症

自閉症スペクトラム障害と社会：大学生の自閉症認識より

田邊 浩

金沢大学人間社会研究域人間科学系

近年、自閉症スペクトラム障害の人びとが増加しているという話を耳にするようになった。果たして実際に増加しているのだろうか、あるいは増加しているとして、それは診断基準が変わったことによるものか、あるいは何らかの要因で実際にそうした人びとが増えているのか。この点について、必ずしも「専門家」ではないのでよくわからない。

ともあれ、「自閉症」への関心が急速に高まっていることは確かであるように思われる。たとえば、自閉症関連の書籍がきわめて多数出版されていることから、それは明らかであろう。自閉症に関心が集まるというこうした社会現象はいかにして生じたのか、その社会的要因はいかなるものであるのか。

自閉症は「社会性の障害」と言われる。社会学は「社会」というものを研究対象とする学問であり、そうであるがゆえに自閉症に対して関心が集まってもよさそうに思えるが、いままでのところ自閉症に関する社会学的研究というものは数少ない。

自閉症である人々の存在が浮かび上がるなかで、社会はどのようにそうした人々を受け入れるべきであるのかということは大きな課題であるはずだ。そのさい、まずは、自閉症に対する人々の認識を確認する作業が必要不可欠なことであろう。

わたしたちの研究グループは、そうした間隙を埋めるために、2011年10月に金沢市民を対象とした意識調査（『発達障害と共生社会に関する意識調査』）を実施する予定である。その準備段階として、2010年に大学生を対象とした質問紙による意識調査（『大学生の障害と病いに関する意識調査』）を実施した。

調査は2010年7月から2011年1月にかけて実施した。調査対象者は石川県内のA大学（比較のために石川県内の別の2校でも調査を実施）の学生で、調査は基本的に授業内に、自記式で行った。有効回収数は1701（調査対象数1849）であった。

自閉症の認識に関しては、自閉症について「よく知っている」「ある程度知っている」とする大学生はほぼ7割であった（アスペルガー症候群は26%、高機能自閉症は18%）。だが、自閉症がどのようなものであるのか尋ねてみると、必ずしも多くの知識を有してはいないような結果を示している。

本報告では、これら調査結果を紹介しながら、自閉症スペクトラム障害と「社会」の関係について考察する。

ライトノベルと自閉症—社会的アプローチの試み

竹中 均

早稲田大学文学学術院

社会学は他の学問に比べ、研究対象も方法も非常に多様であるが、その一つに、＜文学の社会学＞がある。文学を敢えて社会の中の一現象と見て、そこに社会のありようを読み取るうとする試みである。

もちろん文学とは、独特の才能を持つ作家が意識的に生み出すものなので、そこに作家個人の考えが反映されていると見るのが普通であろうが、個人の意識の産物も社会という背景から自由ではないと考える社会学の立場からすれば、このような考え方もありうる。

現在、私が関心を持っているのは、自閉症をめぐる問題にこの視点を導入することである。具体的には、ライトノベルと呼ばれるジャンルの小説の中にしばしば、自閉症的なイメージやキャラクターが登場している点に注目している。

ライトノベルは、文学は読まないがマンガやアニメには関心を持つ中高生向けの読みやすい小説である。その発行部数は膨大であり、また、書き手の数も多く、他の文学ジャンルに比べ、読者と作者の垣根が相対的に低い。その意味では、一般文芸とは異なり、普通の若者たちにとっての日用品とでも言うべき文化である。すなわち、ライトノベルに描かれている事柄や視点は、現代日本の若者の好みや感覚を率直に反映している可能性があり、アンケートによる若者意識調査のような側面があるように思われる。ライトノベルの中に自閉症的イメージがよく登場するということは、必ずしも作家が自閉症的資質を持っているわけではなく、現代社会の姿を忠実に反映した結果なのかもしれない。

この種のライトノベルに対しては、「セカイ系」という一種揶揄的な名が与えられた。その作中では、個人が直面するミクロな経験と、世界全体のマクロな運命が無媒介・短絡的に繋がっていて、本来ならば両者を媒介すべき社会的次元が抜け落ちている。いわば、社会性が障害を受けている状態なのである。このような作品群が「セカイ系」と呼ばれ、論議を呼んだ。

この種の小説が若者の一部に共感を呼んだことは、社会学にとって興味深い。最近、社会学周辺で、ライトノベルを題材にして現代日本の若者の社会的意識を論じる著作が刊行されたのは、その一端であろう。とともに、自閉症に関わる者にとっても、これは示唆的な文化現象ではないだろうか。この特異な文学ジャンルを糸口として、自閉症の世界と定型発達の世界とを架橋できればと思う。

自閉症的完全さ (autistic integrity) の倫理

柴田 正良

金沢大学人文学類 (哲学)

1. 『自閉症の倫理』 (*The Ethics of Autism*, D. R. Barnbaum, 2008, Indiana U.P.) でバーンバウムは、基本的に次の2つを主張している。本発表で、私は、そのうち (ii) の倫理的な主張を紹介し、その含むところを考えてみたい。

(i) 自閉症者は、他者理解の点で、非自閉症者とまったく異なる世界に住む。

(ii) 成人の自閉症者は「治療される」必要がないし、彼らにとっての最善の利益という観点からは、「治療すべき」ではない。だが逆に、自閉症の子の出産は避けるべきであり、出生後は他者との関わりを学べるようにできるだけ早くから手厚い教育が与えられるべきである。

彼女はこの著作の最終章の冒頭で、「僕らは病気なんかじゃない。だから「治療される」なんてありえないんだ。これが僕らの生き方だよ」(p. 204) という若い自閉症者の声を引いている。

2. 彼女の2つの主張の論拠は、自閉症の基本的な特徴がいわゆる「心の理論」(theory of mind) という機能の欠陥、もしくは欠損から生じているというものだ。「心の理論」とは、他者の心的態度(志向性)を自分とは異なった自律したものとして理解し、どんな心的状態(欲求・信念・感情など)が他者に生じているかを推論させてくれるものだ。普通の人はずべて、この理論を自覚せずとも常に使っていると考えられている。

したがって、心の理論の欠如は、心的存在としての他者がまるで存在しないかのような世界を自閉症者に強いることになり、自閉症者は他者との相互交流、相互信頼を築くことが極めて困難となる。

3. なぜ成人した自閉症者を治療することは、彼らの最善の利益とはならないのか? バーンバウムによれば、それは、彼らがわれわれとはまったく異なる世界、いわば他者が存在せず、他者との生活を共有せず、人生の客観的な善さの数々を経験しない世界を生きているからである。というのも、彼らを根本的に治療することは、彼らの「心の理論」の機能を回復させることに他ならないが、それは、彼らにこれまでとはまったく異なる世界で生きる苦難を強いることになるからだ。

4. 自閉症者の世界は自閉症的完全さをもつ。「もし指をパチンと鳴らすだけで自閉症でなくなるとしても、私はそうしたくはないわ。だって、そうしたら私は自分でなくなるもの。自閉症は私の一部なのよ」(Dr. T. Grandin, New York, 1995)。良くなること請け合いだと言われて人格性の「改善」を迫られたら、われわれはそれを、人の自律性の恐るべき侵害だと見なすだろう。自閉症であることが特異な個性であることなら、われわれは、心の理論を持たない他者との共生の倫理を探らねばならない。だが、それは何を意味するのか……

登壇者プロフィール

柴田 正良 (しばた まさよし)

専門は哲学・倫理学。研究テーマは認知哲学・心の哲学等。名古屋大学大学院文学研究科哲学専攻博士後期課程単位取得満期退学。中部大学、金沢大学助教授、ラトガーズ大学(米国)認知科学研究所客員研究員等を経て、現在、金沢大学人間社会研究域人間科学系教授、金沢大学人間社会学域人文学類長(文学部長兼任)、金沢大学附属図書館長、金沢大学子どものこころの発達研究センター教授(併任)。著書に、『応用哲学を学ぶ人のために』(共著)、『交響するコスモス(下巻)』(共著)、『心／脳の哲学(岩波講座哲学05)』(共著)、『感情とクオリアの謎』(共著)等。

田邊 浩 (たなべ ひろし)

専門は社会学理論・現代社会論、福祉国家論。金沢大学助教等を経て、2009年より金沢大学人間科学系准教授。著書に、「常識の転覆」『社会学ベーシックス別巻 社会的思考』(共著)、『数学嫌いの社会統計学』(編著)、「再帰的近代化」『社会学ベーシックス2巻 社会の構造と変動』(共著)等。

竹中 均 (たけなか ひとし)

専門は理論社会学および比較社会学。研究テーマは自閉症をめぐる社会的考察。1995年大阪大学大学院人間科学研究科社会学専攻博士後期課程単位取得退学(博士・人間科学)。大阪大学、神戸市外国語大学外国語学部を経て、現在早稲田大学文学学術院教授および金沢大学子どものこころの発達研究センター客員教授。著書に『自閉症の社会学——もう一つのコミュニケーション論』(単著)等。

実行委員会名簿

実行委員長

大井 学 (おおいまなぶ)

実行委員

工藤 直志 (くどう ただし)
桑名 亜紀 (くわな あき)
竹内 慶至 (たけうち のりゆき)
田中 早苗 (たなか さなえ)
永田 伸吾 (ながた しんご)
三浦 優生 (みうら ゆい)
市川 芳枝 (いちかわ よしえ)
相川 静 (あいかわ しずか)

開催事務局 問い合わせ先:

〒920-8640 金沢市宝町 13-1

金沢大学子どもこころの発達研究センター

E-mail: riskana@staff.kanazawa-u.ac.jp

HP: <http://ristex-kanazawa.w3.kanazawa-u.ac.jp>

主催: 金沢大学子どもこころの発達研究センター

共催: 科学技術振興機構(JST) 社会技術研究開発センター(RISTEX)

「科学技術と人間」研究開発領域 「科学技術と社会の相互作用」研究開発プログラム

「自閉症にやさしい社会：共生と治療の調和の模索」